

(第3種郵便物認可)

各国のホットな反応

去る九月五日から二十一日まで、私は、日中接近下のアジア情勢観察のため、東南アジア諸国をまわって来た。訪問先は香港、南ベトナム、シンガポール、インドネシア、マレーシア、台湾、韓国、七ヶ国であり、かなりの駆け足旅行であったが、田中首相一行防中の直前であっただけに、日中国交に対するアジア諸国のホットな反応をストレートに感得することができた。また、南ベトナムでは、この四月の攻勢いらいの四六(ほうたい)な数にのぼる難民(その多くは山岳民族)のテントをテントロク付近に訪れるとともに、

中国の影との格闘

いま、これらすべてにわたって書く紙数はないので、日中国交に関するアジア諸国の反応については、若干の問題を指摘したいと思う。いうまでもなく、東南アジア諸国は日中接近に強い関心を示し、事態の推移を刮目(かつもく)して見守っていたが、その程度は、われわれの想像以上のものであった。台湾はこの点の当然の例外として考えられるにしても、日中接近に最大の注目を与えていたのが東南アジア諸国であった。突如を忘れることはできない。それは、これら諸国に、内と外からしるべき「中国の影」と必死に格闘せざるを得ないからである。

もどなりこの「中国の影」は各因それぞれ懸案があるが、共通していえることは、まず第一に東南アジアのどこにでも存在し、進出して中国人社会を形成し、現地人にたいする特権的な地位を築いている海外中国人、すなわち華僑が今日の国際環境

日中国交と東南アジア

アジアのなかの中国問題

東京外大助教授 (国際関係論) 中嶋 嶺雄

へという相次ぐ「戦略外交」の衝撃、中国の国連参加は国際関係史から「国家外交」への「変身」を遂げた最近の中国は、これら毛沢東型革命勢力にきわめて冷淡になりつつあるが、そのことが逆に、是が非である北京のエンドースメント(お墨付

この内閣からのひよびである「中国の影」を形成しているのである。それに加えて米中接近から日中接近

下(の)的(的)に、中ソ対立の激化、東南アジア諸国への二回A会議開催にいたる経緯、文の造反外交、最近の印パ戦争とパンクラフシユにたいする中国の対応、等々、すべての問題の糸をまとめるに受けざるを得なかったアジア諸国にとって、中国はあまりにも



中嶋 嶺雄氏

近存在であると同時に、もはやほとんどの「処女性」をもたない、その強引さも巧みさも、またその強さも醜さもすべてを知りつくした対象なのである。

それとはまったく規模の異なることにあることを改めて認識したが、今日、中国は、その「暴徒」のようアジアで、外交関係(大規模関係)の興味、周知のようにインドネシアやカンボジアは中国承認国ではあるが外交は断絶している(をもっているのは、ネパール、スリランカ、ビルマのみという現実)は、以上の現実を物語る証存であろう。

東京—北京への不安

日本政府は、今回、アジアへの特使を派遣したが、本来なら、首相訪中以前にもそのような特使を派遣すべきだったように思う。日本はこれまでアジア諸国に進出してつづけてきたが、今度は、くると背を向けて中国に傾斜してゆくのではないかと

日本とは違った視座 私は、今回の旅行においても、アジア諸国における中国像が、日本の

アジア諸国は、日中国交を日中開戦の戦争状態に外交とは決して見ないのであって、アジアにおける阿六の接近・結合としての目撃しているのである。しかも、これまで信頼し、期待し、依存してきた日本は、いまや五福均御のキッシンジャー

眼前に、すでに東南アジアにおいて「東京—北京極軸」の形成とみることなにかを、つくづく考えさせられた次第である。